

平成二十八年鹿兒島大学附属図書館貴重書公開

玉里文庫善本展

— 国文学・薩摩・近衛家・蘭学・琉球 —



はじめに

鹿児島大学附属図書館では、平成11年から貴重書公開を毎年開催しております。第1回目の貴重書公開は「玉里文庫展」であり、本年は、第1回目の展示を踏まえ、玉里文庫のなかから国文学・薩摩・近衛家・蘭学・琉球に関連する史料を選び出し公開いたします。あわせて本学名誉教授の石田忠彦先生による「有馬父子と農業」、本学法文教育学域法文学系（法文学部）の丹羽謙治教授による「玉里文庫の諸相－蔵書構成と歴史－」の二つの講演を行います。

本館が所蔵する玉里文庫は、島津久光及び玉里島津家の旧蔵書1万8千冊以上からなっています。本館所蔵の貴重書のなかでも、第一級の資料的価値を有するものであり、国内外からの利用の申し込みが絶えません。本学が位置する鹿児島の歴史のみならず、鹿児島と日本、さらには海外との関係を知るうえでの豊富な手がかりを提供するものであり、来館者の方々の知的好奇心をおおいに刺激することでしょう。第一級の歴史資料が時空を越えて放つ魅力の一端に触れていただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の企画展開催にあたりご協力を賜りました皆様に心より御礼申し上げます。

平成28年9月 鹿児島大学附属図書館長 平井 一臣

目次

玉里文庫概要	1
玉里文庫善本趣旨	2
1. 国文学	2
2. 薩摩	6
3. 蘭学・本草学	8
4. 近衛家・有職故実	10
5. 琉球・その他	12

玉里文庫概要

鹿児島大学附属図書館所蔵「玉里文庫」は鹿児島市玉里町にあった玉里島津邸に由来します。玉里島津邸は天保6年（1835）に島津第27代によって造営された別邸「玉里邸」に始まり、西南戦争で焼失したものの、明治12年（1879）に島津久光（1817-1887）が再建し晩年を過しました。

鹿児島大学附属図書館は、その玉里邸に収められていた久光旧蔵書を中心とした書籍群を昭和26年（1951）に玉里島津家より購入し、現在、玉里文庫として所蔵・管理しています。その数は2700余点18900冊にのぼります。蔵書はいくつかに分かれた島津家文書の中で唯一書籍を中心とした構成になっています。特に、学問に造詣の深く自らも研鑽を積んだ島津久光が収集・書写した歴史資料、また久光の兄であり島津28代（1809-1858）や曾祖父にあたる島津（1745-1833）の洋学資料、さらに家と島津氏の密接な関係を示す資料など島津家文書の中でも異彩を放つ資料群と言えます。

玉里文庫は、昭和初期に玉里島津家によって整備された『島津玉里邸御蔵書目録』を基として、目録に記載されていた書籍群を「天之物」、島津久光自筆本群を「地之物」、前掲目録に記載のないものを「人之物」と分けて配架しています。下段に写真を掲げているように書箱も玉里島津家より受け継ぎそのまま使用しています。つまり配架順も保存形態も現在の西洋式の図書館規準ではなく、江戸時代から明治初期まで続いた、書籍に対する日本人の意識を窺うことのできる保存様式となっています。これは大学図書館の収蔵の形としては珍しく、玉里文庫の特色の一つとなっています。

また玉里文庫に収められる書籍には様々な蔵書印が押されています。なかでも「亀印」は、玉里島津邸元執事森昭吉氏によれば、島津久光の「おしるし」とされ、すべての書籍にも押されています。ただ、この「亀印」は天之物・地之物の書籍にはほとんどみられないことから、どのような使い分けが行われていたのかはわかっていません。その他、島津斉彬の蔵書印と思われる「春藪文庫」、「異国船御蔵書」「岩印」「桃印」「康印」など伝来の異なる書籍が玉里文庫に収められています。



玉里文庫善本趣旨

平成11年に鹿児島大学附属図書館貴重書公開の第1回目として「玉里文庫展」が行われ、玉里文庫の中から文庫を代表する様々な領域・分野の書籍を展示しました。今回はその展示を下敷きとして、特に国文学、薩摩、蘭学・本草学、近衛家・有職故実、琉球にテーマを絞って展示を企画しました。

今回のテーマからは島津氏の様々な顔が見えてきます。為政者として、藩の公文書や歴史の書写・編纂を命じる姿、また文化の庇護者・研究者としての藩主、京都とのつながりを維持しようとする島津氏の思惑、琉球に対する厳しい視線などが垣間見えます。今回の展示では膨大な玉里文庫全体を紹介しつくすことはできませんが、その香りだけでも味わっていただきたいと考えております。

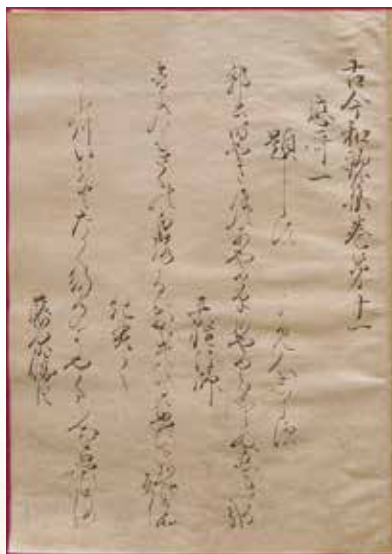
1. 国文学

玉里文庫における国文学関係資料は、当時の大名家が備えておくべき書籍を備えていたといえるでしょう。和歌・漢詩漢文・連歌資料などの雅文芸、名所図会・読本などの俗文芸などが400点ほど収められています。

今回の展示ではその中から、烏丸光広筆『古今和歌集』や『伊勢物語』『源氏物語』、また島津氏に使用した文之玄昌の詩文集、そして島津久光自筆『金槐和歌集』を紹介します。

こきんわかしゅう 古今和歌集 | 天部208番1354 1冊写

『古今和歌集』は醍醐天皇の命により紀貫之らによって編纂された最初の勅撰和歌集である。本書はその江戸期の写本。古筆家（筆跡鑑定）の了延（琴山）（1704-1774）による極書（鑑定書）によれば、^{からすまるみつひろ}烏丸光広（1579-1683）が書写したものとする。烏丸光広は江戸時代初期の公家。彼は細川幽齋から古今伝授を受けて二条派歌学を究め、また書についても一家をなして、寛永の三筆にも決して劣らないその個性の強いその書風から光広流と呼ばれた。本書の本文系統は藤原定家書写の貞応本系統である。



本書は『伊勢物語』に奈良絵本風の極彩色の絵を加えた近世中期の写本である。近世において、『伊勢物語』は將軍や大名家の輿入れ道具の一つとしてよく持参された。いわゆる嫁入り本と呼ばれる。これらの中には本書のように挿絵を伴うものもある。本文の系統は嵯峨本と同じく、天福本と流布本の混合本文である。

図版は在原業平に擬せられる主人公が、京の都から奈良に狩りに行ったときに美しい姉妹を垣間見る「初冠」の段である。



本書は『源氏物語』の室町時代末期頃の写本である。本書は前掲『伊勢物語』と同様に嫁入り本の一つと考えられる。本書は京都の近衛家由来の品で、まず後桃園天皇の女御となった近衛維子（盛化門院）に伝わり、次にその娘である光格天皇の中宮、欣子内親王（新清和院）に渡り、後の関白近衛忠熙に嫁いだ島津興子（郁姫）に譲られたことが伝来書によってわかっている。

また展示している黒塗蒔絵内箱の外題は、源氏物語の研究書『一簣抄』を著した近衛基熙筆と伝えられている。本書の存在自体が近衛家と島津家との密接な姻戚関係を象徴していると言えよう。



紫式部著。本書は鎌倉・室町期にかけての写本であり、前掲『源氏物語』よりも古い成立であることから、区別して「古筆」が付されている。現存する15巻は、空蟬・花宴・賢木・須磨・関屋・絵合・松風・玉鬘・初音・野分・藤裏葉・若菜下・夕霧・匂宮・紅梅。

本書の特筆すべき点は各巻を書写した人物である。古筆家琴山の極札（見返しに貼付）によれば、本書は後醍醐天皇・後伏見院・阿仏尼・覚源（藤原定家男）・冷泉為相（阿仏尼男）・二条為定・世尊寺行俊・世尊寺行房・世尊寺行尹らの手によるもので、天皇や当代一流の公家が本書の製作に関与したことがわかる。本書が玉里文庫に所蔵された経緯としては近衛家と島津家との密接な関係によるところが大きいだろう。本文系統は別本系・青表紙本系・河内本系が混在している。



南浦文集・南浦戲言・南浦棹歌 | 天之114番1003~1005

『文集』2冊、『戲言』1冊、『棹歌』3冊 印記「玄昌」



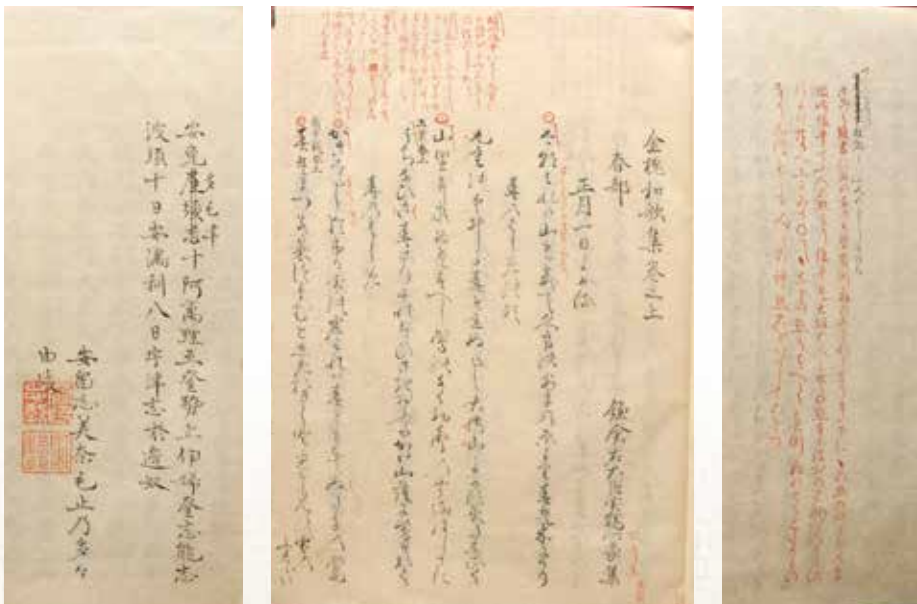
本書は島津義久・義弘・家久の三代に仕えた僧、おんしげんしやう文之玄昌（1555-1620）の詩文集である。玄昌は日向国鉄肥南郷外浦の生まれにより南浦と号した。儒学の一派である薩南学派の学統を継ぎ、朱子学を講じて現代の訓読法の源流ともいわれる文之点を生み出した。

本詩文集には琉球使節との交流や鉄砲伝来を伝える「鉄砲記」など、戦国から江戸初期という激動の時代を生き、島津家の外交顧問としても活躍した文之玄昌ならではの興味深い内容が残されている。また、本書は各冊巻頭に「玄昌」の朱印があることから自筆本との説もある。

本書は平安時代後期成立の漢詩文集である『本朝文粹』(藤原明衡編)の江戸期の刊本である。刊本は整版印刷(一枚の版木に文字を彫る印刷方法)と活字印刷(文字単位で活字を彫り、組み合わせて版を作る印刷方法)とに大別されるが、本書は活字印刷の中でも、いわゆる古活字本と呼ばれる近世初期に行われた活字印刷によって作られている。玉里文庫の中で古活字本は珍しい。

本書は、古活字印刷(本文)と整版印刷(跋文・奥付)が使われており、川瀬一馬『古活字本之研究』(増訂版)にも古活字と整版の組み合わせた『本朝文粹』については言及されていない。寛永6年(1629)刊本の後印本と思われる。

図版は古活字の部分(右側)と整版の部分(左側)が混在している箇所である。



島津久光が薩摩藩士の長野彦兵衛祐喬について和歌を学び始めたのは、天保14年(1843)頃のこと、漢詩や学問に比べると遅いスタートである。久光は、この天保末年から弘化年間にかけて、八代集を初めとする和歌集や詠草を集中して筆写しており、これらは玉里文庫の地の部に多く残されている。「金槐和歌集」もその一つで、貞享4年

(1687)刊本の本文に、賀茂真淵、上田秋成、岡崎俊平(大坂の国学者)、秋郷(薩摩の国学者、和田秋郷か)の説が朱で加えられている。下巻末の奥書には天保15年(1844)12月18日に筆写が終了した由の記述が万葉仮名で記されている。(丹羽)

2. 薩 摩

島津氏は領国の支配・把握のために『薩藩名勝志』『三国名勝図会』など多くの書籍を編纂しています。特に久光は島津家の歴史や藩士の来歴など行政文書を自らが書写するなど藩主の藩経営への積極的な関与がうかがえます。ここではそれらを示す資料である地誌・和歌集・歴史などを中心に紹介します。

■ 三国名勝図会 | 天部69番618 60巻60冊写 清書本

本書は薩摩藩における名所図会形式の地誌である。藩主島津齊興が橋口兼古・五代秀堯（五代友厚の父）・橋口兼柄らに地誌編纂を命じ、天保14年（1843）にまとめられた。三国は島津氏の所領である薩摩・大隅・日向を指し、領内の神社や寺院についての由緒、各地の名所風景を図入りで詳細に記載している。その中には現代では失われたものもあり、近世期までの薩摩藩内の山水・居住・橋道・仏閣・墳墓・旧跡・物産を知るための貴重な資料となっている。

本書は明治38年（1905）に活字版（和装20巻）が出版されたが、玉里文庫にはそれらに先立つ草稿本（70番619）と清書本を所蔵している。図版は清書本で、坊津八景の一つ「中島晴嵐」である。



■ 薩藩名勝志 | 天部42番523 19冊写

本田親孚編。本書は薩摩藩の名所・旧跡、名勝や寺社について和歌・漢詩を交えて記し、485種の挿絵を付した地誌である。文化3年（1806）序。本書に先行する形で、寛政7年（1795）に白尾国柱が編纂した『覺藩名勝考』があり、本書に続いて前掲『三国名勝図会』がある。

本書は薩摩藩の御書物方に収められていたが、久光の命により借り出されたまま玉里邸に残されたという。また『三国名勝図会』の成立に大きな影響を与えており、収載する絵図はほぼそのまま踏襲されている。

図版は鹿児島八景の一つ「桜島秋月」（巻1）である。



『島津国史』は、島津家の編年体の正史。寛政9年（1797）島津重豪が紀伝体の正史『島津世家』の改編を藩校造士館教授山本正誼らに命じたもので、享和2年（1802）に完成を見た。島津家初代の忠久の治承3年（1179）から、重豪の父である23代当主の重年の死去の宝暦5年（1755）までの歴史である。

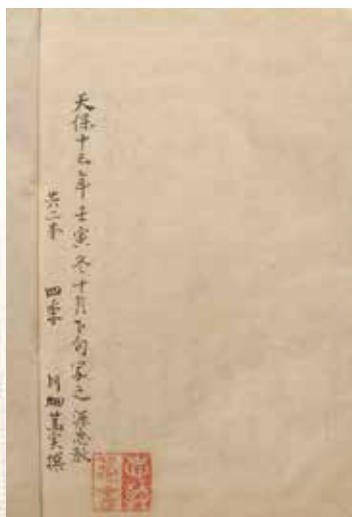
玉里文庫本は、久光晩年の明治19年秋から翌20年にかけて写された久光自身の手になる写本。青色の専用の七行罫紙に、几帳面な字で筆写されている。山本正誼自筆本と得能家本で校合されているの



はいかにも学者肌の久光らしい。図版は、慶長19年（1614）10月の大坂冬の陣の前後の様を記したところで、豊臣秀頼が鑄造させた方広寺の鐘銘をきっかけとして徳川方が大坂城を囲む。（丹羽）

文政11年（1828）8月の撰者川畑篤実の序文によれば、本書は文武の道に切瑳琢磨し、和歌に志の深い人々を、身分にかかわらず後世にながく伝えるために編纂したという。中世から近世にかけての薩摩の歌人の和歌を広く収録している。玉里文庫本の収録歌は1359首であるが、垂城史談会本（垂水市教育委員会寄託）には「惣歌数一千三百七十四」とあり、異同がある。作者は365人（内女性は46人）で、琉球の作者を含む。江戸の26代島津斉宣（溪山）や今和泉家の島津忠厚の和歌サロンを意識して編纂されている。

撰者の川畑篤実（通称は平太左衛門）については未詳。垂水と深い関わりを持つ人物である一方で、



鹿兒島城下に居住していた故か、当時の垂水系の和歌集には名が見えない。

玉里文庫本は、島津久光が天保13年（1842）10月に自ら筆をとって写したものである。（丹羽）

3. 蘭学・本草学

薩摩藩と蘭学・本草学との関わりは島津第25代重豪^{しげひで}（1745-1833）の存在が大きい。重豪は西洋の学問・文物を愛好する大名、いわゆる蘭癖大名として名高く、長崎にいたシーボルトとも交流があったことが知られています。またこの時代に、中国明代に大成した本草学（植物学・博物学・医薬）の影響を受けて薩摩藩独自の本草の研究が進められています。ここでは玉里文庫に残る蘭学関係資料、農業百科事典や本草学の資料を紹介します。

西洋諸鳥詳説・西洋諸鳥図譜 | 天之物180番1177・1178 『詳説』 4冊写、『図譜』 2帖写

本書は『図譜』とその解説である『詳説』から成る鳥類図鑑である。この『図譜』には、『詳説』の初編から4編までに解説されている鳥の図が収録され、その数は280羽にのぼる。一方、『詳説』は本来4編で完本と思われるが、本文庫所蔵は第2, 3編の計4冊のみである。オランダの原著を忠実に写し、彩色したもので薩摩の蘭学・博物学の質の高さを示している。

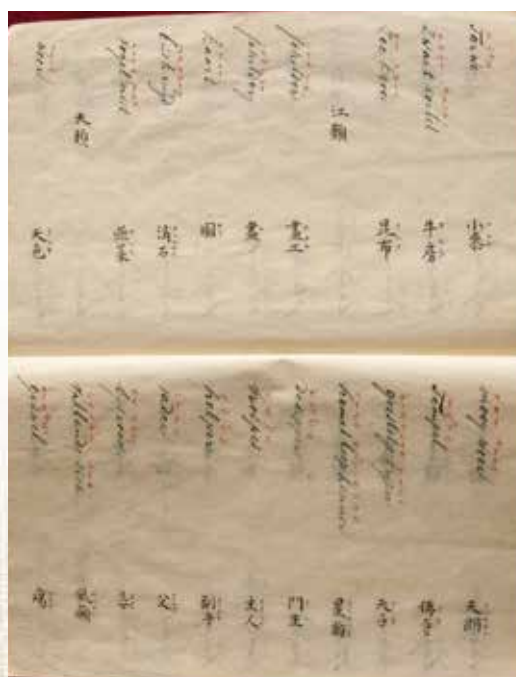
寛政元年（1789）、同9年（1797）序。原著者はオランダのコレネリス・ノーゼマン、マルチアアン・ホウトトイン、図はキリスチアアンセップによる。長崎の和蘭訳司堀好謙訳。なお『詳説』の書写には、島津重豪に重用された侍医曾槃の男玄恭が関わったことがわかっている。

図版はヘラサギの絵である。



蘭語以呂波引 | 天之物181番1189 印記「春藪文庫」

本書は、いろは引の日本語オランダ辞典で853語を収録している。上段にオランダ語を筆記体で記し、下段にそれに対応する和語を配置する。オランダ語には朱筆で発音を示すルビが付され、和語の漢字表記には通常の日本漢語ではなく、中国近代漢語が使用されている。「春藪文庫」の印記から本書は島津斉彬の手沢本であったことがわかっている。本書に収録されている語句に統一性はないものの、「肋骨（リップペーン）」「小瘡（オイトスラグ）」などの医学用語や「鄰封（ナアストラント）」「紅夷（ホルラント）」外交関連用語、農業・漁業用語などが多く、これらは斉彬の興味によって選ばれたのかもしれない。



本書は島津重豪の命により曾槃そうばん (侍医しらくにはしら・白尾国柱はくびくにへしら (国学者) によって編纂された本草図譜・農業百科事典である。農業の風習や農耕具の説明、穀物・野菜・薬草の採取法や利用法、食に関する慣例などが実用的な内容が記されている。まさに薩摩藩の物産学の集大成といえるもので、100巻の計画であったが、火災などにより実際に刊行されたものは農事部・五穀部・蔬菜部の30巻だけである。

また本書は文化元年に刊行された後、何度か刷を重ねている。このうち、おそらく特装本と推測される465の『成形図説』だけ多色刷が施されている (図版)。



本書は島津重豪の命により編纂が開始された、南西諸島の植物の薬効などを記した医学・薬学書である。著者は琉球の呉継志という架空の医師で、彼が薬草の効能について中国の本草学者に質問し、その答えを記すという問答形式となっている。記載種は本土及び当時支配下にあった琉球・吐噶喇トカラ・屋久の植物であり、清書本では148種、刊本では12種加えられ160種が記されている。

薩摩藩は近世期に山川・佐多・吉野の3ヶ所に薬草園を開いており、開化政策や国内交易における薬草需要増加に伴い、薬草本の需要が高まったものと考えられる。呉継志に仮託された本書も実際は薩摩藩の薬草園で編纂されたことが天保6年の序文から明らかである。

4. 近衛家・有職故実

島津氏と近衛家の関係は、文治元年（1185）に惟宗（島津）忠久が鎌倉幕府より島津荘の下司職に任命され、近衛家が島津荘の本家であったことが始まりです。一時は関係が途絶えた事もあったようですが、15世紀後半以降、長きにわたって両者は互いに利用したり擁護したりと持ちつ持たれつの関係を維持してきました。

特に両者の関係が深まったのは近衛^{のぶすけ}信輔（1565-1614）が坊津に配流となり、島津義久が彼を厚遇したことによって、近世期の両者は婚姻関係を軸に密接なつながりが築かれていきます。

また島津氏は大名として儀礼・服装（有職故実）などを学ぶために武家故実家の伊勢家とつながっていたことが知られています。さらに近衛家との関係から香道・茶道など諸芸を学ぶ必要性がありました。ここでは近衛家と有職故実に関する資料を紹介します。

このえのぶすけこうおんうた 近衛信輔公御歌 | 天の部5番84 1冊写

近衛信輔（信尹）は、安土桃山時代から江戸初期にかけての公家。近衛家第17代当主。号は三藐院。和歌連歌など諸芸に優れたが、能書家としても知られ寛永の三筆の一人である。秀吉の朝鮮出兵に際し後陽成天皇から勅勅を蒙り、薩摩の坊津に3年間配流の処分を受けた。

本書はこの薩摩滞在時の和歌や文事を記したものである。島津氏は失意の近衛信輔を厚遇し、信輔は関ヶ原の戦い後の薩摩を擁護するなど近世期における近衛家と島津氏の密接な関係の土台を築いたといえる。

図版は、近江八景になぞらえて信輔が選んだ坊津の名勝八景（坊津八景）につけた和歌である。



このえとのかざだち 近衛殿飴剣 | 天の部108番1931 1巻写



飴剣とは朝廷の儀式に用いられた飾太刀のことである。本書は近衛家以外の公家が所持していた「近衛殿飴剣図」を写し、近衛家に確認し相違点を注記したものである。また、公家の名家である広橋家の飴剣との比較も記してある。

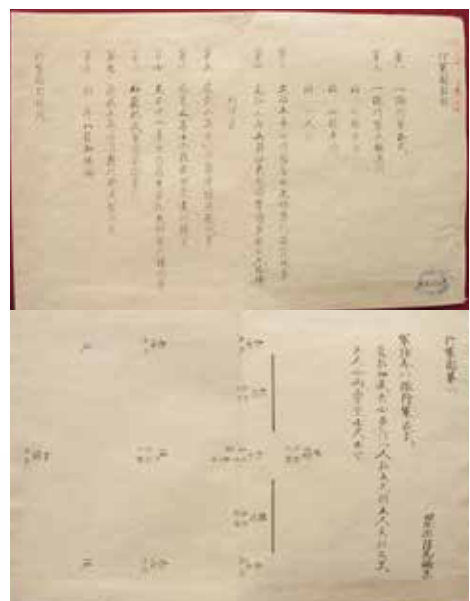
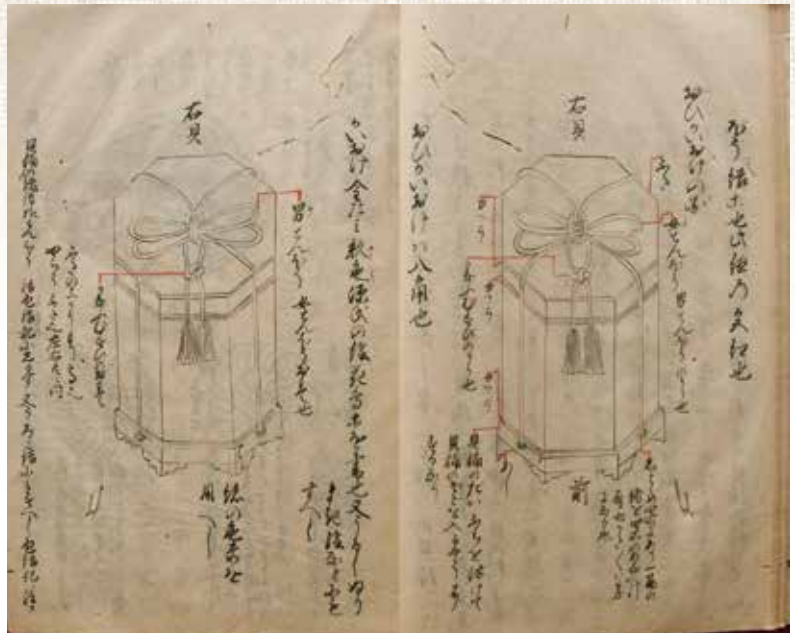
このえけかしわばさみ 近衛家柏夾 | 天の部108番1930 1巻写

本書は近衛家当主等が朝廷における儀式で用いた冠を描いたものである。ここには近衛家に加え山科家、高倉家の冠も描かれている。本書は江戸時代の有職故実家である伊勢貞丈^{さだたけ}（1718～1784）によって写され、子孫の伊勢貞春が所蔵していたものを薩摩藩士有馬伴左衛門純応が写したものである。



本書は婚礼に関する武家故実を収集・記録して図解を加えたものである。婚礼の衣装や道具、嫁入り行列や盃事といった諸儀礼の進め方など、婚礼の儀を執り行うための故実が詳細に記述されている。

図版は1組の貝桶であるが、貝桶は大名家の姫の婚礼調度の中で最も重要な意味を持っていた。それぞれの貝桶にはハマグリが入れられる。ハマグリは同一の貝としか合わさることがないため、和合の象徴と考えられていた。それゆえにこの貝桶は婚礼行列の際に先頭で運ばれたという。



元治元年（1864）、島津久光の招きを受けて鹿児島を訪問した有職故実家、栗原信充、その二男信允、孫の信和は、同年5月から8月まで鹿児島に滞在した。久光は信充の著作の出版を願い、信充らが江戸に帰った後、鹿児島城二の丸に編集所を置き、『職原鈔私記』『軍防令講義』『官位令講義』を出版した。

『国学者伝記集成』によれば、明治7年（1874）信和が、久光側近の中島一三を通じて、久光へ信充の遺著の寄贈を申し出た。また、それらは久光の住居である二の丸の書庫に収蔵されたが西南戦争の際焼失したという。しかし、玉里文庫には、鎌倉幕府の衣服について考証した『鎌倉幕府服制』（図版左）、中世・近世の軍勢の行列の構成・順序を記した『行軍図』（図版右）、栗山潜峰著『保建大記』を論難した『保建大記弁』（天13 - 405）など信充自筆本が残る。（丹羽）

5. 琉球・その他

慶長14年（1609）、島津氏は、当時独立国で明に朝貢していた琉球国に侵攻し、事実上支配下に置きました。これによって琉球王国の自治権は認めるものの、琉球の貿易の実権は薩摩藩が握りました。また琉球は寛永11年（1634）からは將軍と琉球国王の代替わりの度に江戸へ使節を派遣することが義務づけられ（江戸上り）、薩摩藩の役人も同行しました。ここでは玉里文庫に収められていないものの琉球使節の行列の様子を描いた卷子本を紹介します。

また同じく玉里文庫外から、鹿児島ならではの作品を2点紹介します。

りゅうきゅうじんぎょうしょうのず 琉球人行粧之図 | 番外5034 1巻写 16cm × 924cm

本図は後掲の『琉球人往来筋賑之図』とあわせて2巻1組で、琉球使節の「江戸上り」の様子を詳細に描いた記録である。描かれている使節の人数は、正使をはじめとする琉球人126名と薩摩藩関係者394名の計520名である。薩摩藩は琉球使節団に中国風束帯を着用させ、道中は琉球音楽を演奏させたという。本図は図中に嘉永3年（1850）10月と年時の記載があることから、それ以降の成立と考えられる。図版は琉球使節正使の輿、及びその前後の部分である。



りゅうきゅうじんおうらいすじにぎわいのず 琉球人往来筋賑之図 | 番外5035 1巻写 16cm × 569cm

本図は琉球使節が通過する江戸芝口一丁目界限（現新橋一丁目）の様子と幸橋見附の図及び薩摩藩屋敷を描いたものである。作者上月行敬の経歴は未詳であるが、跋文によれば、上月行敬が外祖父である栗野盛友の例に習い、江戸の状況を国許の子弟に知らせるために執筆したとある。

図版は江戸芝口一丁目付近の風景で、見世物の周りに集まる人々や商店街に並ぶ商品等が細部まで丁寧に描かれている。



毛利正直^{まさなお} (1761-1803) 編。『大石兵六夢物語』は、近世薩摩の代表的な物語である。先に絵巻の形で成立したものを下敷きとして、後に毛利正直がまとめたものと考えられる。

内容は、大石兵六という薩摩の侍が郊外の吉野に出没する狐の退治に出かける冒険譚。狐は鞍馬坊主・ヌツペツ坊・牛ワク丸・山辺赤蟹・山姥・父親・和尚など様々なものに化けて兵六を苦しめる。愚直な兵六の姿には、当時の藩や藩士への批判が込められていると言われ、滑稽と憤激を基調とする談義本の類に入ると考えられる。

編者の毛利正直は現在の鹿児島市加治屋町の出身。通称、治右衛門。号、月知庵・夢橘散人。天明4年(1784)11月の藤原実房序があり、跋文中には「寛政四年(1792)子八月下旬写畢」と見えることからその頃に写されたものと考えられる。『大石兵六夢物語』は玉里島津家に所蔵されていたことはわかっているが現在は欠本である。本書は2005年に新たに購入した別の一本である。

図版は、茨木童子に追いかけて、帯迫(鹿児島市吉野町)まで逃げてきた兵六に襲いかかる重富の一眼坊の図である。



しずのおだまき
倭文麻環 | 番外5033 11巻11冊(9巻欠)写

白尾国柱の自序によれば、文化初年に呈上した本書(但し現存の本文と同じものとは言えない)は、文化3年(1806)3月4日の江戸大火で焼けてしまったため、文化8年の師走に再度下命があり下書きを提出するようにいわれ、翌年藩主島津斉興に呈上したものである。全60話。すべての話に彩色の絵が入る。内容は、(1)近世初期の合戦譚、(2)島津領内に伝承されてきた行事等の由来譚、(3)怪談、奇談(中には「小夜中山夜啼石」の伝承など他国のものも収録する)に大別され、若き藩主への教育書として編纂されたものと思しい。そのため、江戸時代には流布せず、近代になってから注目されるようになり、明治41年(1908)には和装の活字本が刊行された。玉里文庫本は島津久光の側に仕えた中島一三(白圭)によって明治20年代半ばに筆写されたものである。(丹羽)





平成二十八年年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

玉里文庫善本展

—国文学・薩摩・近衛家・蘭学・琉球—

編者 亀井森(鹿児島大学学術研究院法文教育学域教育学系・准教授)

解題執筆者 亀井森・丹羽謙治(同法文学系・教授)

解題執筆協力者 安部真琴・石川貴大・岩永大貴・下川恭子

(五十音順、教育学研究科大学院生)

発行 鹿児島大学附属図書館

発行日 平成28年9月9日